

吐、書き表はし方  
漢字を以て吐き表はす

## 二〇、漢字略體の吐と片假名

吐とは朝鮮で漢文を読む場合に其の語句の下に挿入する朝鮮語の助動詞、助詞等をいふのである。「世宗實錄」(十)に

「凡讀書以諺語節句讀者俗謂之吐。」

とあるのは即ちそれを指すのであつて、諺語とは即ち朝鮮語のことである。而して漢文に吐を附することをば「吐를 단다」又は「懸吐」といふ。

吐を書き表はすには漢字を以てする場合と漢字の略體を用ふる場合と、諺文を以てする場合との三様ある。即ち

(一) 漢字を以てする場合。

此の場合は吏道の場合と同じく、漢字の音又は訓を以て宛てる。例へば

(イ) 父母隱天性之親羅是生而育之古爲愛而教之爲祭奉而承之古爲孝而養之爲飛尼云々  
 (ロ) 於是厓聖人伊首出爲繼天立極爲時尼云々  
 (ハ) 孟子伊曰孩提之童伊無不知其親是及其長也爲隱也無不知敬其兄也羅爲時尼羅爲時  
 中に於ける(イ)の隱、是羅、爲古、爲祭、爲古、爲飛尼、(ロ)の厓、伊、爲舍、爲時尼、(ハ)の伊、伊、是祭、爲也、隱、羅、爲時尼羅の如きは何れも吐である。今此の吐の讀方と意義とを示すと、

(イ) 父母は天性之親イラリ生而育之コ愛而教之ム奉而承之コ  
 (け承) 孝而養之ニニ云々

(ロ) 於是エ聖人イ首出サ繼天立極スニ云々

(ハ) 孟子一曰孩提之童イ無不知愛其親イ及其長也ヤ無不  
 知敬其兄也ラニ云々

となる。今此等を音と訓とにふるひ分けると次の如くなる。

(a) 音に屬するもの。隱(은)。羅(라)。古(고)。祭(제)。尼(니)。厓(애)。伊(이)。舍(사)。時(시)。也(야)。

(二) 漢字の略體を用ひる場合。  
 (b) 訓に屬するもの。是(이)の義。爲(을)の義。飛(나)の義。

此の場合も前の場合と同じく音又は訓を以て宛てる例へば

(イ) 鸚鵡。能言。不離飛鳥系。猩猩。能言。不離禽獸云々

(ロ) 夫爲人子者。出必告。反必面。所遊。必有常系。恒言。不

稱老云々

(ハ) 殺氣浸盛。陽氣日寒。水始涸。

(ニ) 君臣上下。父子兄弟。非禮。不定系云々

中に於ける(イ)の、(ロ)の、(ハ)の、(ニ)の、

系の如きはそれである。今此の吐の讀方と意義とを示すと、

(イ) 鸚鵡(가)能言(을)나(지)不離飛鳥(를)며(나)猩猩(이)能言(을)나(지)不離禽

獸(이)나(를)云々

(ロ) 夫爲人子者(는)出必告(을)고(고)反必面(을)며(面)所遊(을)量(을)有常(을)며(有)所習

을(을)必有業(을)며(有)恒言(에)不稱老(나)라(는)云々

の如きこれである。

吏讀漢字  
を以て書  
表はす吐

漢字略體の  
吐と片假名

以上述べた所によつて見ると、吐殊に漢字を以てせる(一)の場合は吏讀なるものと著しい類似を持つて居る。併しながら朝鮮の學者の多くは其の間に區別を立てて居る。即ち吏讀は新羅時代の古語であるが吐するものは恐らくは李氏朝鮮以後のものであらうといふのである。成程吏讀には今日全く使用せられない語が多く見出されるが、中には臥(외)矣(의)徐(여)の如く、吏讀にも吐にも兼用せられるやうな文字もある。要するに吏讀といひ吐といふのは、固より根本的の相違あるものでなく、時代によつて多少の變化を來したものと見做すべきものである。

又(二)の場合に屬する吐は多くは漢字の偏傍冠脚等一部分を採つて應用したもので、我が國の片假名と大いに其の成立の趣を同じうして居る。中には漢字の略體たる吐の「ㄷ」吐と片假名「ヤ」漢字略體の吐なる「ㄴ」吐と國語の符號たる「ㄹ」爲て)との如く字源及び字形までも全く同一であるか又は類似して居るものがある。併しながら片假名が今日に至るまで生命を保ち、國字として實用的に使用せられて居るに反し、此の種の吐が今日に於ては殆んど實用を遠ざかり、僅かに

漢籍の句讀として用ひられる位に止まつて居るのは、一面に於て大いに趣を異にして居るといはねばならぬ。吾人は文字發達の歴史に關する此の二種の實例を目前に示され、其の由つて來る理由を討究するに於て無限の興味を感ずるのである。